

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13107

研究課題名(和文)日本人英語学習者による主語の段階的習得過程における日本語と指導の影響

研究課題名(英文)The influence of Japanese and instructions on developmental processes of subjects by Japanese learners of English

研究代表者

須田 孝司(Suda, Koji)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：60390390

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文):日本人中学生と大学生を対象に、日本語と英語の主語の知識について調査を行った。英語の主語に関しては、中学生は人称素性と数素性の習得に困難があり、大学生でも数素性の習得が難しいということがわかった。日本語の主語の判断では、中学生は、「は」や「が」といった助詞に関係なく、文頭に置かれた有生名詞を主語と判断する傾向があり、また、有生性の情報が利用できない場合、中学生は文頭の名詞を主語に選ぶ誤りが多くなることが明らかになった。さらに、中学生の英語の主語の知識と日本語の主語の判断に関連はなく、日本語の主語が正しく判断できなかったとしても英語の主語は適切に習得できていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人にとって英語の習得は困難であり、その要因として日英語の言語間の違いが影響していると提案されている。日本語と英語の文中における主語はその扱いが異なっており、英語では文頭に主語が明示される必要があるが、日本語ではその必要はない。しかし、これまでの言語習得研究では、日本人英語学習者にとって文頭に名詞句を置くことはそれほど困難ではないことがわかっている。本研究では、日英語の主語の扱いの違いが日本人の英語習得にどのような影響を与えるのか検証し、中学生であっても日本語の主語の知識は不確定であること、言語間の違いでは英語の主語の習得困難さについて説明できないことを提案する。

研究成果の概要(英文):This study investigates the knowledge of Japanese and English subjects by Japanese learners of English. With regard to the subject in English, we find that junior high school students have difficulty in acquiring personal and number features, and university students also have difficulty in acquiring number features. As for the subject in Japanese, junior high school students tend to judge the animate noun placed at the beginning of a sentence as the subject, regardless of particles such as "ha" and "ga". Moreover, when animacy information is not available, junior high school students make more errors in choosing the noun at the beginning of a sentence as the subject. In addition, it is revealed that there is no relationship between the knowledge of English subjects and judgment of Japanese subjects, indicating that English subjects are appropriately acquired even if Japanese subjects cannot be judged correctly.

研究分野：第二言語習得

キーワード：日本人英語学習者 主語の習得 主語と主題の区別

### 1. 研究開始当初の背景

2020年度から実施されている学習指導要領では、小学3・4年生から外国語活動として英語活動を行うようになり、小学5・6年生においては、英語が教科として指導されることになった。これまでの日本の小学生を対象とした英語習得研究では、小学校の段階では教科として英語が体系的に指導されていない状況であったため、学校ごとに教えられる内容や指導時間に差があり、小学生の英語の文法や語彙の知識などについてはそれほど多くの研究が行われていない(樋口他, 2007)。そこで本研究では、そのような英語を学び始めた小学生が、どのように英語の文法を習得していくのか検証するため、主語の知識に焦点を絞り、まず日本語の主語の知識から調査を開始した。

国語教育では、小学2年生で日本語の主語について扱うことになっており、研究開始当初は、小学生が日本語の主語をどのように身につけているのか、また日本語と扱いが異なる英語の主語をどのように身につけるのか、調査することが目的であった。しかし、予備調査の時点で小学生の日本語の主語の知識が不確かであることが明らかになり、さらに新型コロナウイルスの蔓延により、小学校などへの部外者の立ち入りが制限される事態となった。そのため、調査対象を小学生から中学生に変更し、日本人英語学習者の日本語と英語の主語の知識について検証することにした。

### 2. 研究の目的

本研究では、ごく初期段階の日本人英語学習者の日本語の主語の知識と英語の知識を比較し、日本語の知識が英語の主語の習得にどのような影響を与えているのか、調査を行う。

日本人にとって英語を身につけることは困難であり、その要因として言語間の差異の影響が指摘されている。日本語と英語では、主語の扱いが異なっており、英語では明示的な主語が必要とされるが、日本語では主語が明示される必要はない。また、英語では、代名詞以外、主語が形態的に示されることはないが、日本語では格助詞「が」により主語が表される。もしこのような違いが英語の主語の習得に影響を与えるのであれば、日本人英語学習者にとって主語の習得は困難であることが予測される。

これまでの言語習得研究では、日本人英語学習者は明示的な主語を容易に習得できるという提案(Wakabayashi & Negishi, 2003)や、日本人英語学習者は動詞の前に名詞句を置くという規則を習得しているにすぎず、主語と主題の混乱がみられるという提案がある(Kuribara, 2002)。さらに、日本人大学生に英語の主語と主題の区別について指導を行った結果、中級レベル以上の大学生は主語と主題の区別ができるようになるが、初級レベルの大学生には指導の効果があまりなかったという報告もある(白畑, 2015)。したがって、ごく初期段階の日本人英語学習者にとって英語の主語の習得はそれほど容易なものではなく、主語と主題を混同することが予測される。そこで本研究では、日本人の中学生と大学生を対象とし、日本語と英語の主語名詞句における日本語の格助詞、語順、有生性の影響について調査を行う。

### 3. 研究の方法

日本語と英語の主語の習得を調査するため、日本人の中学生と大学生を対象に2つの実験を行った。

#### 3.1 実験1(英語の主語)

英語では、文頭に主語名詞句が置かれ、その主語名詞句が持っている人称と数の情報が動詞に引き継がれ、三単現-sなどのように動詞の形が変化する。したがって、主語の認識や主語の習得は動詞の形態を確認することによって確かめられる。そこで、実験1では、英語の主語の人称素性と数素性の習得について、主語と動詞の一致という観点から調査を行った。

実験では、日本人の中学生と大学生に(1)のような英文を提示し、その英文の文法性を判断してもらった。

(1) My friends writes Christmas cards every year.

実験に際し、(2)のような三単現-sに関連する8タイプ(各3文)の英文と、三単現-sとは関係のない12文の英文を用意した。

- (2) a. タイプ1: T1(1人称単数: 正文)  
I play the piano every day.  
b. タイプ2: T2(1人称複数: 正文)  
My brother and I go to Hokkaido every summer.  
c. タイプ3: T3(3人称単数: 正文)  
My father works at the bank.

- d. タイプ4: T4 (3人称複数: 正文)
  - My children watch movies on TV in the evening. (語彙)
  - My sisters write letters to my grandparents. (形態)
  - Tom and Mike love soccer. (統語)
- e. タイプ5: T5 (1人称単数: 非文(過剰使用))
  - \*I cleans my room before dinner.
- f. タイプ6: T6 (1人称複数: 非文(過剰使用))
  - \*My mother and I goes shopping on Sundays.
- g. タイプ7: T7 (3人称単数: 非文(脱落))
  - \*My father cook dinner for my family.
- h. タイプ8: T8 (3人称複数: 非文(過剰使用))
  - \*Some people watches YouTube every day. (語彙)
  - \*My friends writes Christmas cards every year. (形態)
  - \*Mary and Judy loves Korean music. (統語)

実験の結果, a) 中学生は, 1人称でも3人称でも単数より複数の方が難しい, b) 中学生は, 複数の場合1人称より3人称の方が難しい, c) 大学生は, 3人称では単数より複数の方が難しい, d) 3人称複数は, 大学生の方が正しく判断できる, ことが明らかになった。

この結果をもとに, 本研究では, 中学生は主語の人称素性と数素性の習得に困難があり, 特に数素性は大学生になっても習得が難しいということを議論している。さらに, 日本人英語学習者が英語の主語を適切に習得するには時間がかかるということも提案している。

### 3.2 実験2 (日本語の主語)

小学校の国語教育では, 「誰が(は)」「何が(は)」のついた名詞句が主語になると説明しているが, 言語学では, 動作の主体である名詞句に「が」がつく場合, その名詞句が主語になり, とりたて助詞「は」のついた名詞句は文の主題になると説明している (cf. 白川, 2021)。

子どもの言語習得研究では, 格助詞「が」の産出が主語の習得と直接結びつくわけではないが, 「が」の使用は「は」よりも早いと報告されている (小林・佐々木, 2013)。また主語の習得研究では, 格助詞「が」ではなく, 語順や名詞句の有生性が主語の判断に影響するという提案もある (Hayashibe, 1975; 伊藤・田原, 1986)。

そこで実験2では, 日本人の中学生と大学生を対象に, 日本語の主語の習得における格助詞「が」, 語順, 名詞句の有生性の影響について調査を行った。実験では, (3)のような8タイプの日本文(各3文)を使い, 文中の主語を指摘してもらった。

#### (3) 各タイプの平均正答数 (SD)

	中学生	大学生
タイプ1 場所は 物(主語)が	0.91 (0.947)	1.89 (1.038)
タイプ2 時は 物(主語)が	1.27 (1.149)	2.49 (0.752)
タイプ3 人(主語)が 物を	2.67 (0.708)	3.00 (0.000)
タイプ4 人(主語)が 人を	2.55 (0.809)	3.00 (0.000)
タイプ5 物(主語)が 物を	2.31 (0.966)	2.91 (0.283)
タイプ6 物は 人(主語)が	2.02 (0.960)	2.91 (0.339)
タイプ7 人は 人(主語)が	1.11 (1.077)	2.33 (0.961)
タイプ8 物は 物(主語)が	1.31 (1.102)	2.70 (0.620)

タイプ1とタイプ2では, 第二名詞句が主語になっており, 語順と助詞の影響を検証している。タイプ3から5では, 第一名詞句が主語になっており, 名詞句の有生性と助詞を検証している。タイプ6から8では, 第二名詞句が主語になっており, 語順と有生性と助詞の影響について検証している。

実験の結果, すべてのタイプで中学生より大学生の方が正答数が多くなっており, 日本語の知識は中学生でも不十分であると考えられる。しかし, 大学生でもタイプ1, 2, 7の主語の判断に困難が見られ, 第二名詞句を主語に選び難いことがわかった。また中学生は, 「は」や「が」といった助詞に関係なく, 有生名詞が第一名詞句の場合に主語と判断することが多くなっており, さらに中学生が選んだ誤りを分析すると, 同じ有生性をもった名詞句が使われ, 主語の判断に有生性の情報が利用できない場合, 中学生は第一名詞句を主語に選ぶ誤りが多くなることが明らかになった。したがって, 中学生はまず名詞句の有生性の情報をもとに主語を判断し, 有生性の情報が利用できない場合は, 語順で主語を判断する傾向にあることがわかった。

### 4. 研究成果

本研究では, 日本人の中学生と大学生を対象に, 日本語と英語の主語の知識について調査を行った。英語の主語に関しては, 中学生は人称素性と数素性の習得に困難があり, 大学生でも数素性の習得が難しいということがわかった。日本語の主語の判断では, 中学生は, 「は」や「が」といった助詞に関係なく, 文頭に置かれた有生名詞を主語と判断する傾向があり, また, 有生性

の情報が利用できない場合，中学生は文頭の名詞を主語に選ぶ誤りが多くなることが明らかになった。さらに，中学生の英語の主語の知識と日本語の主語の判断を比較すると，それらは関連しておらず，日本語の主語が正しく判断できなかったとしても英語の主語は適切に習得できていることが示された。

#### 参考文献

- 伊藤武彦・田原俊司 (1986). 「ハとガの動作主性の発達」パン, F.C.・八代京子・秋山高二(編) 『ことばの多様性』文化評論出版, 87-106.
- Hayashibe, H. (1975). Word order and particles: A developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*, 8, 1-18.
- 樋口忠彦・大村吉弘・田邊義隆・國方太司・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子・箱崎雄子・植松茂男・三上明洋. (2007). 「小学校英語学習経験者の追跡調査と小・中学校英語教育への示唆」『近畿大学語学教育部紀要 7 (2)』123-180.
- 小林春美・佐々木正人. (2013). 『新・子どもたちの言語獲得』大修館書店.
- Kuribara, C. (2002). Misanalysis of Subjects in Japanese-English Interlanguage. *Second Language*, 1, 69-95.
- 白川博之 (監修). (2021). 『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 白畑知彦. (2015). 『英語指導における効果的な誤り訂正 - 第二言語習得研究の見地から - 』大修館書店.
- Wakabayashi, S. & Negishi, R. (2003). Asymmetry of subject and objects in Japanese speakers' L2 English. *Second Language*, 2, 53-73.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 須田孝司・大畑真也	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 日本人英語学習者による他動詞の自動詞化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 須田孝司	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 TOEIC IPオンラインテストの特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 須田孝司	4. 巻 1
2. 論文標題 3単現-sの習得 - 人称素性と数素性の影響 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第二言語習得研究の科学 1 言語の習得	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 須田孝司・新田泰祐	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 日本の高校生の英語スベリングにおける指導の効果	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡村明夢・須田孝司	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 必修英語科目における成績評価の妥当性と学生の英語力	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田孝司・新田泰祐	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 日本の高校生に見られる英単語のスペリングエラーの特徴と要因	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 31-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 deHaan, J., & Suda, K.
2. 発表標題 The SDGs "Terakoya": Ideas into action for high school students and society
3. 学会等名 21st Century Language Teaching Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nitta, T., & Suda, K.
2. 発表標題 Effective vocabulary instruction for high school students in Japan
3. 学会等名 PALL 2023 Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 大瀧綾乃・須田孝司・横田秀樹・若林茂則	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 第二言語習得研究の科学 2 言語の指導	

1. 著者名 大瀧綾乃・横田秀樹・須田孝司・中川右也	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 202
3. 書名 第二言語習得研究の科学 3 人間の能力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------